第四章　東京医学専門学校開校と指定校認定への新たな苦闘

（大正5年9月以降）

大正5年9月24日
島田三郎議長を私邸に　九月二四日　協賛員になって頂くこと

「昨日御出デ下ダサッタソウデアルガ、失礼イタシマシタ。其後ドウナリマシタカ。ウマク行キマシタカ。ア、ソレハイイデスネ。佐藤様[注1]、良クヤッテクレマシタネ。教授の方も千葉[注2]、井上[注3]、八代[注4]、三宅[注5]、皆良く知っています。達次郎先生[注6]も技術にいーし、人格もいいが、何しろ若いで世間は知らぬが、佐藤、森[注7]、中濱[注8]の顧問はいーですね。佐藤様は学術の上、読書の人で人格の欠点なく、実に私淑いたして居ります。一人のため四百余名救われることで満足でしょう。まあどうか勉強してその実を挙げられんことを。医は申すまでもなく蘭学により文明を我国に入れた日本の文明の仲介者であるが、人間を肉の如く取り扱ったために非難がありまして、日本医専の問題も起りたのです。そこをよくお考え、有徳の医者となってい頂きたい。永い間の困難艱苦を決して忘れないように有効に使って、他日の成功を祈ります。賛成致しましょう。」

（注1）佐藤進　（注2）千葉真一（東京医学専門学校耳鼻咽喉科学教授）　（注3）井上達一（同生理学教授）　（注4）八代豊雄（同外科学教授）　（注5）三宅鉱一（同精神科学教授）　（注6）佐藤達次郎　（注7）森鷗外　（注8）中濱東一郎

子爵加藤高明閣下を下二番町の邸に

子爵ハ兼而新聞紙上御覧之通り、合同問題之為め来客中にて私に代って御話を聞きくれとの事で、私ハ山本執事であります。先般学校問題起った五月、学生諸君御越し被下まして長様も御越し下さいましたね。其後如何なる事件の経過今日の新設になりましたか、御話し承り度存じます。・・・・・・。

誠に諸君之熱勢之致す処、至極目出度存じます。佐藤[注1]、森[注2]さん居られば、此度は結構の至りで、指定もすぐ来るこ事と存じます。其由申上げ、然る上で御返事申し上げましょう。」

拝啓　過刻は御来訪の節ハ失礼仕候。其際御下命之件、早速委曲、主人に取次申候処、左に返事可申上命せられ、実に御一筆啓上仕候。日本医専学校紛擾以来、不一方御同情申上居候処、今般、佐藤男爵其他名士の御尽力の結果、東京医学専門学校創立せらるべき旨拝承乍蔭喜罷在候。就而は新規協賛員に加名すべしとの御下命ながら主義として従来かかる種類のご依頼に応じたる先例無之。遺憾至極になりへ共、不悪ご謙恕被下度存候。

右に取り敢えず御知申し度、如何御座候。

敬具

大正五年九月二十四日

加藤高明

執事

東京医学講習所　学生総代

市原[注3]経之助　殿

長　委三美　殿

敬具

(注1)佐藤進　(注2)森鷗外　(注3)市原経太郎か(日本医学専門学校2年生。鳥取県出身)

三輪田元道氏を三輪田女学校に

「この手紙の主意は承知致しました。元より結構なる事で、秋さまも福本様とはよく連れなって講演をやります。高橋さんの御子様が私の学校の先生で、また寺尾様もよく知っております。教授諸先生も立派なもので、多くが佐藤さんの親戚のように伺っています。今度はよいよ理想的の学校が設立できましょう。然し、医学校ですから普通の学校と異なって三十万はいるでしょうね。主意には大いに賛成し、承諾いたすが、近頃の賛成員には寄付金が伴うようですね。

一昨日も初めに賛成してくれときて、すぐ寄付してくれとある。どの字書にも賛成に金は伴わないように思うがと話したが、そこはどうでしょう。実はこの学校も母の名義ではあるが実は己れがやっているので。随分いるですよ。服でもこんなのを着てるようなくらいですからね。そして私は外へ寄付は願いたくない。旨得たので増築しています。角に此度建てていますが、あれでも一万五千円の予定でやっています。ですから、先ならばいたしますが、近年は。どうか然るべく御承知願いたい。協賛員は承知いたしました。よろしく申して下さい。諸君も本願がかないまして実に目出度いですね。益繁転を祈ります。」

三輪田元道・三輪田高等女学校は三輪田元道の母真佐子(愛媛県松山の漢学者)が明治20年に神田に開い

た翠松学舎がおこりである。元道は二代目校長となった。第二次大戦後は三輪田学園中学校をへて三輪田学園となった。

近藤次繁博士を駿河台病院に　（空白）

石黒男爵を

僕来ていう。「主人は今日は病気デ御座いまして、お目にかかることはデキマセンデスガ、然し切角の御訪問デスカラ少しナラバ面会シテモ宜敷いトノ事デスガ如何デスカ。」

「少しデモ宜しければ御面会オ願イます。」

「今日おれは病床で長くは会えない。用事を早くいってくれ。」

「協賛員にとの手紙を出し。甚だ恐れ入りますが、是非ご賛成していただきたく存じます。」

「うん、おれの名を出す事はできない。それはおれは名を言わば尊敬しているのだ。それは申せなばわからんが、一例申すとだ。おれも随分医学界にも動き、また、若い時は名を出したものだ。それにおれの名は薬にも何にも一として名を出して居らぬ。それはむやみに名を売らんという主旨があるからだ。

今から二十年前と思う。おれの五十年来の友人だが、其子供が会を作っておれの名を取って出して後来ては名を借りましたと頼んできた。私はそれはならんとことわり、七日しても名をとらねば、おれは告発するからそう思えと帰した。また、来て頼みいろいろいったが聞かず。それなら二週間以内に名をとれ、もし取らねば告発するからと申して、二週間後行ってみればまだ名を出していたから、すぐ訴えて勝ったけれど、八円五十銭弁護士料を取られたことがある。かようにまで名を尊ずるという事はこうなのだ。

おれが内務省の嘱託で全国を回った事があった。其時、信濃だと思う。一寒村の老人病床に居て、衰弱したるより息子は毎日毎日一里半もある所へ牛乳をとりにいっていた。処がそれはなかなかの事でない処へ、牛乳にまさるヘルツという薬があると聞いた。当時有名の博士等十三人の証明もあるのでそれを飲む事として文明の恩沢だとおれに喜んで話した。

其後おれは欧州から帰った時であった。富士見軒に就き日本医学会なるものを起こした。それはどうも欧州文明の医学を学んだ洋行学者、青山博士などを始めどうも世人が有難く思わないでそれらに演説

させて文明の輸入を計った。然し、大学派よりは恵る思われた。然し、集まる者六百余人であった。その時隈川宗雄[注1]と申す先生、ヘルスにつき大いに論じた事がある。その十三人の連中はいたが何ともいうどころか、頭は上がらなかった。思い出せば大隈が足をこつけられた日で、佐藤と高木君行ってくれと頼んだ[注2]。丁度其時であった。明治二十二年だ。それから二十八年にもなるがヘルツにつきこれに論駁した者は一人もないが、やはり十三人の証明が付いている。これを見て大いに感じた事がある。ああ名は大切なのだ。もし、この証明なくてこの人に信用を与えなかったならば、この人は一生孝養に終ったのに。この薬、この証明あったため、その欲を飯す、残念の生涯を送らせたる事と、それ以来決して名を粗末にしてはならぬと深く深く感じた。おれは土方伯[注3]や東久世伯[注4]とは大いに反対だ。いかに知らなくてもよしよしだ。」

紹介あってそれにつき話すと、

「ああ、それはその人に問うてください。銘が同じと、何か名産だとて「かも」持ってきよった位やられる。おれは大反対だ。然しね、生活をする事はよくする。大橋図書館も大倉学校[注5]もおれが建ててやったのだ。大橋がきて実は本で金をもうけましたから、十万円を出して図書館を建てようと思うから、建てて下ださい、と来たから、よーし、それは結構じゃ、というので建ってやった。来年で十年となるが、もう少しで二十万円となる。日々三百五十人の読書家が出入りしておる。大倉が六十一になったで、何か記念のため、ためになることをしたい、学校を建てて下さいと来た。それで幾ら出しますかと

聞いた処が、五十万円。ほんとですか、蒲団を下りて行ったところが、真実だという。確かかと手をにぎり引き受けた。年十万円づつとし、五十万円出した処が、大倉が夫婦して洋行してかえる日せまったので、学徒に駅まで歓迎させてやるという考えで、小生が五万円かって、そして1年早々建って、今では千百六十三人の卒業生を出し、殆ど七十万円の財団となっている。授業料も取らぬ考えでやったのだが、それではいけぬというので、取って居る。然し、優秀の人には卒業の時やっている。百万円にともなったら全部帰しやる決心で居る。これ等の金など皆金庫を作ってすぐでも人に渡せるように準備しておる。赤十字社もおれが建てたのだが、すぐに渡してやった。

どうだ、学校はたえず教授しているのだな。卒業の人も勉強しているわね。認可を早くとらねばならぬのー。その時はおれも文部大臣、次官なりへいって大いにいってやる考えだ。かえって賛助員でないがいい都合の事が多い。いずれ高橋君にも返事はするがよく言ってください。今いった事もいっておいて下さい。そして形式的の事が出来上がったら、知らせて欲しい。文部省へ云うというのも一般に法科的の学生の随所は左程困りもせず、又左程脱線せんが、どうも医学的いわゆる科学的な学生は前途困り、大なる放浪者が出る。これは大に社会制作をしても大いに考えなければならぬ。よくいって認可を早く与えろという考えである。かかる事を佐藤君が台湾に居るとき話した事がある。それでか台湾には医学校が、又、旅順には工科学堂、奉天にも医学校が出来、科学的学校の発達所以であるという。

先生も立派だな。先日、井上達一[注6]君が来た。君の講義は語学が多いから非難がある様だから、少し少

なくして話す様いつておいた。又、田沢[注7]もでているようだね。顔ぶれもいー。佐藤進様は人格もよし、財産も大したものだ。中濱先生も有名だ。森林太[注8]は医学界よりも文科の才の欲で有名だ。ここ等は人にしられて。」

「ほんとーですか」

「おれらがなってじゃまくらいである。議会で政府を攻撃して愉快くらいに思っている位だからね。」

暇して帰る時、先生自ら見送って、靴べらを小生に御貸して下さいました。柴田[注9]君曰く、「実に有難き、その石黒男爵然も、尤も自噴強き先生より靴べらとりもらいたる、長く怠るなよ。美しい人に靴のひもくくりしよりも花ならずや」と。

(注1)隈川宗雄。東京帝大医学部初代生化学教授。(注2)その日、外務大臣・大隈重信が爆弾テロにあったが、佐藤進の手術により一命をとりとめた。(注3)土方久元 (注4)東久世通世敏 (注5)現在の東京経済大学。大倉喜三郎の寄附により設立された。(注6)井上達一(のち東京医学専門学校生理学教授) (注7)田沢遼一 (注8)森鷗外のこと。(注9)柴田万吉:日本医学専門学校2年生学生。長崎県出身

大正5年10月12日
貴族院議員　和田彦次郎氏を自邸に。　時に十月十二日午後0時三十分
柴田万吉君同道[注1]

「御手紙は拝見しましたが誰が主脳となりやって居られますか。実に諸君にとっては目出度い事か。殊に佐藤様が教授の主人という事は此上もなく財産はきっとよるでしょう。然し、金というのは得がたいものですでね。財産の方は如何してありますか。分かりました。私の如き、元より学なく、智なく、名もないものですが、御邪魔差し支えなければ御加名下さっても苦しくはありません。実に永い間の苦心でありました。」

「時に、先生私は中学時代より実に広島県先輩は後輩を援助せず悪しくはなるか存じませんが、門がないと承っていましたが、今度学校の事件で他の県よりも大に先輩諸先生らが援助下さった事を深く感謝するのであります。」

「一体かかる事も聞きますが、然し私共も随分人を生活したがどうも成功した者がないです。第一銀行に出て居る。それから三井物産に出ておる位で、殊に法科は如何様です、十人で二、三人しか成功せない様で困ります。今も少しは生活していますがどうも困る。それに中途で先生、私は方針をかえようと思いますが、出てきてしかる事も出来ず、今迄かくする次第で、私の子は二人で三千円位しか使いま

せんが、人の子には一万円以上入れております。かかる次第、どうも面白くないというので今は芸備協会なるものが出来まして、これはなかなか発達して既に八、九十人に及んでるそうであります。

とかく広島藩と福山藩と分かれていましたが、日露戦争当時より広島県として決して分かつべきでないというので、一所にしてやっています。そして主だちたるものが二十幾人、水曜会を催け、毎月一回より茶談する事としていました。藤井男爵[注2]なども昨年より入会せられた様です。

昔の人は苦学したのも随分多いでした。皆人に頼らず独立的やったるので、高橋君[注2]などよいよ苦学であの位置を勝ち得られたので、又自分としても大いに青年の戒めとして誇りとして居られる様です。あの人も別語学などをやったものではないですが、然し山林局になど居られた時は大いに独てし森林法をとき、時の品川子爵[注3]などに愛がられたものです。真汐野に引き、何でも十何年目に、沖縄の県知事された様に承っています。このように皆苦学したもので、私も十六才の時うちを出て大阪にて少し居り、それから大西卿につき陸軍大将にならんと志、尾道の奥君と古い軍服のようなもの着て、学行上京したのです。内から困ったら帰りくるであろうと金は出ず、人のうちの子守をしたこともあります。どうも子守ではいかんというのでいろいろ考え、寺に(丁度その坂の下の)参り、穴を掘ることを願ったです。まず、一円より一円五十銭で二人で大にやつたもので、月三十円位とりました。今の金で五十円もいたしましょうか。そして独学。私はまるで字書でやったです。竹、芝、木とどこにあるとちゃんと覚え二度の字は頭をぶっていました。語学の方は少しづつ、教会的のものに行きならったです。そうしてとうと

売金なく困った事もあり、冬などは大根もつからず、その時は湯をかけ、そしてつけて居りました。そうして見ると、今は誠に結構なことです。」

（注1）柴田万吉（前出）　（注2）藤井包総　（注3）高橋琢也　（注3）品川弥次郎

大正5年10月15日
南大曹博士を南胃腸病院に、十月十五日午後二時

「協賛員になってくれとの御手紙ですね。然し僕は学校の性質を知らん。又この五名の御方を存じません。それにかかることは佐藤様から何かとあって然るべきとぞんじます。そして、二、三日前の雑誌にも順天堂の機関学校との、又老人方は承知だの若手は反対してるとも聞いた。そして日本医専と東京医療学校の関に、これもあるで考えさしてくれたまえ。然し学生には同情してる。そして吾は後援会に入ったと承知はしない。そして帝大あたりの先生とことなり開業医は立場に困るからな。一人でも敵は

つくってはならず実際困るから。僕は開業医に賛助員たれと申す事は進めない。どうかそういってくれたまえ。君方には誠にすまん。僕の考えでは、日本はまだ医者は多くていいと思う。国家試験もなくなったから医学校は望む。そして日本の現今では、多くは駄目の医者だからね。独逸など十幾つの大学がある。みな大学の卒業で1辺してる。日本のように階級はつかぬ。僕がベルリン大学にあった時、君はファーストクラスかセカンドクラスかサードクラスかと問うたことが、それによって試験するといったことがある。出来うるば、等一にしたいものである。繁殖の盛なる日本にはまだ医学校は多いと思わぬ。日本の学生は困るわね。語学が随多く卒業して活動の期に入れんわね。然し、大学でたからとて大した事はないよ。ぼくの所へも専門学校出、二、三人居るが、普通用いる語は決して不自由はせん。」

大正5年10月15日

平山金蔵博士を平山胃腸病院に。十月十五日午後二時

「僕は東京医学専門学校の新設のメドついて賛助シテ呉レトノ意デアルガ、如何ナル理由ノ下ニ新設

サレタノカ少シモ知ラン。各月新聞紙上に日本医学ノ紛争云々ハ見テイル。然シテ何レガ利アルヤ否ヤ。私ハ諸君ガ新開校ニ至ルマデノ努力ハ一双奮ッテ職ニアリツキ得タキ感ガアル。実際日本ハ目下、医者ガ多イ。同僚ハパン問題ニ困リテ、人ニオジギシテル様子デアル。ナカナカ困難デアル。僕ナンカ往診ニ行キ困ルコトガアル。ソレハ何ヘ左程シテアゲテイイカ。世ハカカル状態デアル。仁義ト呼ンダ医者ハミジメナモノデ、立派ナ大家デスラ人格ハミトメナイ有様デアル。何シニ貴方ニハ同情モシ、又スマヌガヨク佐藤さんとも会い話しを承り、しかる後、何とか申し上げましょう。

自分の考えでは医者は多イト思ウ。トイウノモ東京アタリデ八百人、田舎デハ千～千五百人ニ一人トナッテオルノデアロウ。此八百ヤ千人ニ何人患者ガアルカ。田舎デハ一人三百円クライニハナラナイ。ソレニ看護婦、女中、車夫ラ置キ、又医者ハ外ヲ飾ラネバナラヌカラ、随分金ガイッテナカナカパンモ容易ノ事デハ食えぬ。そして完全ナラそれしも専門学校ではまだ不足ノ感がある。というても、卒業後研究にあるときはいいが、さなくては不十分である。然し、近頃帝大あたり卒業して研究する人が多いようになったのは結構な次第である。一体、日本の大学は余り長すぎ人生の活動期を失ってる。そして大学では各科ともに実にいじめられ卒業後研究の能力を失ってしまう。少なくとも卒業後、生理、病理、次に内科、それから自分の好んだ科をやらねばならんのですからね。独逸の様に階級の統一を慾している。日本の大学と専門学校の間でよい加減である。

此教授方を見るにいかにもいいようであるが、皆研究のことでない多忙の身である。そして井上[注1]、

緒方君[注2]など職あるに専門校とは。僕は後日注意しておく次第である。これは随分やかましい問題となっておるので苦しき時は望みをたくされた人が後になってどこにおるかともいえぬ始末となる。これは大いにパンの問題デモアロウが、なげかわしい事である。そーして見ると僕はさまで難行せなん。慶應の医科、百万円で何が出来ると人がいってるではないか。」

（注1）井上通夫か　（注2）緒方知三郎　（病理学教授となり、のち東京医学専門学校の校長となって大学昇格へ尽力した）。

平山金蔵（1876～1932）：茨城県出身。１９０４年に東京帝国大学医学部卒業。本邦の胃腸病学の魁で、日本消化器医学会長など務めた。平山胃腸病院院長。

東京府会議長、斉藤孝治氏を、神保町の事務所

「日本医専の学生が学校に行こうが行くまいが、それは学生の自由にして決して束縛はせぬ考えである。僕等より見ると認可のある学校の方が確かだと思う。なかなか此上困難でありますぞ。我々二五人の評議員はただ学務の上で財団には関係していません。然し話は磯部氏よりありますが、確とした金も入らず、目下ある慈善団と交渉中であります。柏田学監はよしたのは事実であります。あの人も人格に至っては疑いを始めよりからして入れてありました。立教大学合併問題意もやめとなった様ききます。おっ、これも少々不賛成でした。とに角、金銭については学生に迷惑をかけぬから学校はあくまで勉強した方がいいでしょう。」

大正5年11月17日
高島平三郎先生を西片町の自邸に、十一月十七日午後六時

「僕は前申したとおり妥協派の口に加されて、それも知名の人々の名があるからして四百名のためならと賛成したのであるで、一度も出席した事はない。元よりかかる事件のきたる事は小生らの不徳のなす処で、学校もそれ以来出でず。学校よりは先日、長い間いろいろと有難うと礼書が来ていて、全く手をきった次第である。ああゆうやり方では到底やっていけまい。柏田学監いう、どうも人格のない人とか見えんね。まだ、一度も会った事はないが。」

「幽霊がでると申しますが、真に形になり表れることがありますか」(津端)。

「僕は故郷で死した後で、私は知らないです。そしてその人を見たことがありますが、それは良くあることで、確か見たという人を聞く事です。科学上、西洋のあるいは学者の如きには写しだすことが出来るといっています。私ども四角、三角丸くらいは空中に写す事ができます。勿論、その人しか見えないで多くは労より起こるようですね。この頃欧州戦によくこの事を書きあるようです。ある事でしょうよ。また、土地に大いに関係しるので陰鬱の家などはよくないですね。貸家はよく気をつけねばなりません。昔よりいう、足がないなど、そんな事ないです。西洋語でハルタチオンといっていますわね。」

「先生今年の文展はいかがですか。ご批評を。」

「そうですね。まだ一度でよくも覚えていませんが、一体に色彩が非常に発達してきましたね。西洋画は随分発達して見えますが、どうも西洋人の書いたようなものは出来ませんね。『はにわ』あれなんか、あんなつまらぬものを描きだすのですか。力がいりますね。『夕立』、『こぞの今日』なんか別に深き意のある絵でありません。『花の野』、あれは良く出来ていました。『行春』、『日錦の夜』なんかよく書けていますが、意味のある画は今年は見受けぬようでした。それよりもたしかに中村の『田中館博士の像』、これは傑作でしたね。洋画の面白いのは二科でしょう。随分努力のあと見え、面白いのがありますわね。」

大正5年11月28日

井上角五郎先生を一番町の邸に、十一月二十八日午前八時

「其後如何ですか。どうやら設立出来た様子ですね。此を見るに中々立派な方々揃いで、順天堂、中濱病院のクリニックなら此上ないですね。今度は設備さえ出来れば、認可とか指定とか何でもないでしょうね。財団の方は出来ましたか。此賛助員など少しは出しましたか。余り金持ちもないようだが、先日以来私は遊行していませんでした。留守に高橋さん来てくださったそうです。委員長に高橋さんはいいでしょう。よく知れた人で信用もありなかなか物をするのに熱心ですからね。今頃、二、三十万位すぐ出来ますよ。何れ近々に又面会していろいろと相談にのりましょう。」

井上角五郎(1860.10.18～1938.9.23)　広島県・福山市出身。福山藩校・誠之館を経て慶應義塾卒業。長委三美の中学校(誠之学中学)の大先輩であった。福沢諭吉の知遇を得て、朝鮮政府に招聘された。現地でハングル活字を始めて導入し新聞を発行し、近代ハングル文字の嚆矢となった。帰国後、１８８０年には第一回衆議院議員総選挙に出馬し議員となった。その後、北海道炭鉱鉄道専務、新日本製鉄室蘭製鉄所の設立、日本製鋼所設立、京都電気鉄道社長、名古屋火力発電所設立、日本ペイント会長、千代田生命保険相互の創立、日本瓦斯取締役などわが国の実業界で大きな貢献をした。大正5年当時、実業界第一人者としてその名は国民的に広く知られていた。東京医学専門学校開設時に高額の寄付を行なっており、様々な形で財界から大きな支援を行った。なお、井上が取締役であった北海道拓殖会社からは二千円という高額の寄付が寄せられている。

大正5年12月2日
順天堂病院、佐藤達次郎先生を四谷の新邸に、十二月二日午後一時

「雑誌作るのもいいでしょうが、も少し目鼻がついてからにしてはどうです。すでに四ヶ月になりますが、何等の出来ばえもなく、文部省、内務省へ出る人からよく注意されるので、甚だ当惑する事があります。勿論、創立者でないからから、かまわぬものの、実に困りますね。一体何をして御られることかわかりません。さっぽろびーる[注1]で諸君はすでに首を取った様な顔して御られるので、心ひそかに心配していました。五名士の方で金は出来る。何でもないから、教授とあってそれはすぐですとやったので、今となっては困ります。第一いろいろの先生に対して何と言っていいか言葉のない次第であります。三日前も中央衛生会で各年毎に配布する件と講習所を年限に採用する件の難しいとの話があったそうで、何とぞ一日も早く出来る事を祈ります。一体、秋さん[注2]から委員長を渡したの、間違いですと思います。秋さんは財産もあるし、決心されたのだから、どこまでも責任を負わせして、しかたなき時は出資させねばならないと思います。認可もすぐはくれませんから、早く支度して準備が必要です。

この際ですから、新平民でも商人でも何でもいいから、大いに金を取らねばなりません。少しづつでも作ってそして半分も出来れば。此度は勢いを得まして、どうでもなりますからね。土地を買ってそれを抵当に入れ始めより小さいものより始めるというように致したいものです。そして誰某よりの金で解

剖室というようにしたら、記念となっていいでしょう。此状態ではどうも学生を入れるのを好まないです。それは何でもない人を許すと同じですからね。賛助人にならぬ人でも心配して尋ねてくれます。是非五人をつついて急いで下さい。さすれば、諸君の為ともなるし、勉強の方はつくす考えであります。で、今申した様の訳で、専門学校どもなった節に写真はい出す事といたしましょう。大成を期したいものです。」

(注1)大正5年9月11日に東京医学講習所が開所され、その日の午後、向島サッポロビール園で懇親会が行われた。
(注2)秋 虎太郎は病気のため、委員長を高橋琢也に譲った。しかしながら、期待された秋の資金的な援助が途絶えてしまったことを校長佐藤達次郎は問題としている。

大正6年12月9日

謹啓、益御安康、恵賀陳者、日本医学専門学校の退学生四百余名、救済の為、東京医学専門学校の創立に着手し、昨秋以来、都は勿論、北海道迄も出勤して篤志家を歴訪し、援助を請いたる結果的、一千名の協賛員を得たるもその寄付来た予定に達し難く、しかも救済事業は一日も猶予難致、取敢えず私財を投じて校舎建築中、不幸にも去十月一日の暴風雨に逢うて全部倒潰いたし、寄付目録再築へ係りおりしも、甚大の被害と材料の暴騰との為め、費用は大いに増加いたし候間、北海道及び青森などの所有地数箇所を提供するの外、尚又、急場の費用を弁する為め、所持の書画骨董弐千点を処分して、之に充度候に付き来る十一日より二十日まで上野公園日本美術協会内に展覧し、正札を以って売却いたし、ご多忙中恐入候えども窮余の為、学生格段の思召を以って買上就下度、伏して懇願仕候。

頓首、敬白

大正六年十二月九日

私立東京医学専門学校　創立委員長

東京医学講習所主幹

高橋琢也

（大正6年12月10日、東京日日新聞の記事）

財を鬻いで学校建築費に　十五万円を寄付す。日本医専より分立せる東京医専に在学せる同郷の学生を救わる為に奇特なる高橋琢也氏困惑を重ねつつある日本医専の退学生四百余名末梢の目的を収めて後援会を組織されしを当時報道せしが、その後大方の同情金を以って、府下大久保に東京医学専門学校ならびに付属病院を建築中なるも、三十余万円の寄付金の予定が漸く半なる十月の暴風雨のため、建築物に大損害をきたし、創立一層困難に陥りたるよし。協賛員中の麹町中6番町の高橋琢也氏は、北海度および青森の所有地数万坪を売却し為、秘蔵の書画骨董約二千五百余点を11月より20日まで売却を行い、四、五万前後の売却金を挙げて、創立費用に寄附することに決せりと。近頃の義挙というべし。これにつき高橋氏は語る、「私は元来同校には何の関係もなかったのですが、学生中に同郷広島県出身者が十、九名ばかりあるのと気の毒な退学生諸氏に同情の余り片肌脱ぐ覚悟をしたのです。売却の美術品は全て正札付といたしましたが、自分はこういうことには、素人であるから品物によっては価値以上の高値がついているものがあるかも知れません。しかし、それは気の毒な学校に寄附するというお考えで是非買っていただきたいと思います。とにかく、私の今回の挙が動機となり同校に対する同情者が多くなれば幸甚の至りです」云々

大正6年12月10日　　日（曜）　　東京日日　（新聞）

大正6年12月22日

宮中顧問官、佐藤正少将　　本郷区弥生町二、十二月二十二日

奥様、「どうぞ御上り下さい。今、散髪屋に行って居ります。度々御出で下さいまして済みません。どうぞ。先日から風をひきましてせくので、もう東京はいやだ。とても悔らないから広島へ帰りたいと申しまして昨日は御殿へ伺行して行くと申しまして床屋に参りましたのです。貴君は広島でいらっしゃいますか。高橋さんの御親類でいらっしゃいますか。芦品郡ですか。そうですか。まあ御上り下さい。すぐ、帰って参ります。」

応接間十二畳、根津の崖に望んだ座敷で遠く上野の森が寛永寺の塔が美しく見える。根津一帯の町が目の下にいーながめである。

「どうぞ日当たりの良い所にいらっしゃい。」

床にはよせ書きの大幅が東原さんの書いた額もかかって美しい客間である。かくしている内に少将帰らる。

「御客様です。」

「だれだ」

「芦名郡の長さんと先日いらっしゃった東京医学校の学生さん。」

松葉杖にもたれて座敷にきながら言葉なく目はするどく、茶目である。

「先帝畏くも将軍の平譲の戦いに天晴なる戦功をお褒めとなり失った足をかゆるに義足を下賜さる。将軍曰く、恐入りたる事ながら、どうもよく使えない。もうといーのを下さればよいのに。有難迷惑である。先帝陛下、聞召し、米国より立派なるを取り寄せ、また下賜相成しのとか。」さすがは一風変わったる鬼将軍もむべなりだと思わしめた。

「骨董売り払い、中止の様子であったが、やっとるんかな。高橋も感心だ。一体どうしてかくもやってくれるのかね。学校は生活、其後どの位進んでますか。学生は何人居るかの。広島県出身は何人いるかの。森田篤正あれはどちらに居るかね。そうかね。おれも明後日には是非行きたいが、然し風邪を引いているので明後日か明々後日は広島へ帰ろうと思って居る。都合をつけて行きたいものだ。どうか高橋さんによろしくいって下さい。」

佐藤正(1849〜1920)広島市出身。日清戦争に従軍し、重傷を負い左足切断した。第三代広島市長、宮中顧問官歴任。大正四年に修道中学校総理となった。

主催者　学生会本部
相談役　鈴木　半義
　　竹下　文隆
　　松原　一一
協賛員　本校教授
揮毫者
　　地上秀畝　尾竹竹波　岡田蘇水
　　田中頼璋　竹田敬方　芝景川
　　益田柳外　外32名

一口　拾弐円
当日借上揮毫アリ　十二月二十三日　南町クラブ

佐藤博士　三十口　池上、田沢、清水先生　十口
教授先生ニテ　百七十八余
全二百五十一本
加入芳名

本郷千駄木50　医　尼子四郎

「高橋先生[注1]がよいよ引き受けてくれられたので恐入っている。佐藤博士[注2]は心からやってくれますか。どうも誠意なくよく逃げる人ですがね。芸備医会でも何か致したいと思っています。どうも会う折がなく、一度会ったぎり。青山博士[注3]がなくなられたので急がしくて出来る事も出来ません。よろしく申しておいて下さい。」

(注1)高橋琢也　(注2)佐藤達次郎　(注3)青山胤通博士、東京帝大医学部内科学教授、総長。大正6年12月に逝去。

小石川西白山前町20　医　高野熊男

「実に高橋先生は感心ですね。尼子君からも聞いたが偉い動家でしたね。尼子君面食らっていました。」

神田区錦町1–10　医　松原正寿

「ドウデス。芸備医会ニ入ッテハ。昔私共ノ学生ノ間ハ随分接待などやったものだが、今は一人も学生はコナイデス。」

「大こわにーデハアリマセンカ。」

「月ニ2回ハシテオリマスガ、一時借銭をした。もうやって行けます。母がしきる女学校はそれは給金が安くて平均四十円で立派なもの。中学校は六十円以上となりますからね。」

「アノ私の叔父に先生(母)ニ歌を書いて頂きよろこんでいます。」

「ハ、まあ今の三人、三輪田、跡見ら三人の中デハ母が一番古イ。今年八十デ三輪田は七十三、跡見が七十六デスカ。其内母が一番若イ。時ニ二人で書ク時ハ書に間違イアルコトガアリマスヨ。女流会ノ中デハ母ノ書いたのが一番イイソウデス。短冊デハ五十銭位スルソウデス。ドウモ田舎トハ言葉低ク頼ミマスガ、書イテヤッテモ礼ヲヨコサン様ノ次第デ、一切知ラナイデハ書キマセンヨ。書クハ夏、軽井沢デヨク書キマス。筆ガ傷ムト墨ガ大変デスカラネ。筆ハ支那ノデ三十円位スルソーデス。コレハモラッタノデス。月曜、月曜ニ画ヲ書イタリ、短冊クライヲ書イテイマス。卒業生ニハ短冊ヲアゲルコトニ決メテイマス。画モ野口サント宮中ヘ出テル時、中宮様方ノ稽古サレテイタノヲ母ガ見テ、私モヤッテミタイカラト野口サンニ手本書イテイタダキ、七十二ノ年カラヤリダシタノデス。

世ニ六十ノ手習イトアルガ、母ハ七十二カラ出シマシタ。」
「恐れ入リマスガ、私ニ書イテモラッテクレマセンカ。」
「ヨロシューアリマス。書イテモラッテアゲマショウ。ヨクミテキナサイ。画ナラ墨ヲツケ伸バスノダカラ、墨ヲ摺ル事ガイラナイデ。」
「ヨロシクアル様。」

大正7年1月20日

法学博士　寺尾亨先生を霊南坂の邸に

一月二十日　難波静夫君と[注1]

「実ハ今日先生ヲ伺ッタノハ他デモアリマセン。昨年末、画会ヲヤッタノデアリマスガ、中ニハ名士ノ書ヲト望マレル人ガアリマスデ、一ツ先生ニモ書イテ頂戴したいです。」

「何時か学生諸君が来て、画を買ってくれとのことで、私は貧人で買うことは出来ぬ。然し、おれの書は貧しいが一つ頭山[注2]や犬養[注3]に書かせてやるがよい。頼んであげると申して居た。一寸頼んでいたから行って御覧なさい。僕も蓋切りとして書いておきます。紙は晩翠軒で中画全紙がよかろう。」

医学講習所学生参上

寺尾　亨

三浦　観樹　先生

生六

御揮毫御願度件

犬養木堂　兄

河野磐根　老翁

頭山満　老兄

「此中デモ三浦将軍ヤ犬養君ハナカナカ骨ダ。三浦将軍ニハシカラレルカモ知レン。我儘ノ者ジャ。ソレデモ度々ト行クノダ。殊ニ趣旨ガ良イカラ書イテクレルデアルヨ。犬養ニハ一寸相ッタカラ願ッテイタ。最モ多クノ人ガオル席上デアッタガ、『モウ筆ハヨレタ』トイウ。『趣旨ガイイ。ソレデハ画ヲ書イテアゲヨウ。』『ソレデハ画デイイカラ願ウヨ』、ト頼ンデオイタ。犬養ノ画、少ナイカラ面白イダロウ。三浦ヨリハ犬養アタリナカナカ金ニナルヨ。マア度々行ッテミルノサ。」

(注1)日本医学専門学校2年生、鹿児島県出身

(注2)頭山満(1855.4.12～1944.10.5)福岡藩出身。板垣退助の言論による社会改革に共鳴。玄洋社社長。寺尾亨、犬養毅や福本誠らとともに孫文を支援し、中国革命(辛亥革命)を支援した。また、大正4年にインド独立志士ラス・ビハリ・ボースの日本亡命を助け、インド独立の支援をおこなった。アフガニスタン独立にも貢献した。弘田浩毅(総理大臣)や中村天風らに大きな影響を与えた。学生団は総退学当初は頭山満を中心に新しい学園作りをめざしたようである。「奮闘

の半年」によると磯部理事らが学生団を撹乱するために頭山の名前を出した。このことから、頭山は親友の寺尾亨に学生団の支援を託したと考えられる。なお、寺尾亨とは家が隣同士であった。「東京医科大学50年史」でも、「しっかりやるよう」と学生に応援があったことが記述されている。多くの名士訪問については頭山の応援もあったと考えられる。

(注3)犬養毅(1855.4.20〜1932.5.15)岡山市出身。号は木堂。明治から昭和にかけての政治家で、１９３１年に内閣総理大臣に任じられた。

東医創立委員　福本日南先生を
小石川指ヶ谷邸に

「先生。今回千葉に画会開催につき色々とご配慮くだされまして三輪(田)校長も色々とご世話下さいまして有難く存じました。ついては重ねにお願いですが、当地の賛助員の方に創立委員福本先生、寺尾先生書が欲しい、願ってくれとのことで誠に済みませんがどうか書を書いて下さい。」

「いや僕は守りはまずいの。書にはらなん。書くまい。」

「どうかお願いいたします。」

「寺尾ハ書イタカね。ヨク書イタネ。而シテ澤山書にもいうノダロウ。マアとデハ墨ヲ付ケテ見ルカ。」

一時間モ墨スリて後先生、寒気烈しく。植物園かすかに雪二、三点。羽織ヲヌギ、画全紙ヲマタゲ、書中曰、

蛍火の影より細き埋火に
天地をこがす光ありけり

法学博士、創立委員　寺尾先生を邸に

女中取次ぎに

「今夜は書くから墨を擦って置いてくれ。」

書斎において暫く雑談。君の墨を擦っているうち、先生天機嫌にて、

「やや、今晩は書くよ。よう来た。そうわなくてはならぬ。今晩は張疆君が来て愉快に飲んだところだ。僕が書くのは原料がそれも少しではいけぬで。ハハハ・・。字を書くとて支那人からいうと、書くとはいえぬよ。この額などなかなかよく出来とる。まあ書いてみようかな。僕が書くには手が入る、字にいうものは筆勢いなりては。即一気呵成だ。一人ハ硯ヲ持ッテ墨ヲツケルニ便ニスルノダ。そこで一人ハこの紙をシッカリモチ、一人ハ硯をヨク見エルニシテクレ。此筆は良クモナイガ然し二十円位スルダロウ。この硯モ共ニ支那ヨリノ土産物ダ。ヤハリ原国ダカライイネ。毛氈コレヲモラッタノダ。ハハ・・。ドレ書キヨウト。」

中画全紙ニ乗リ

山水有清音　水長月清処　山紫水明